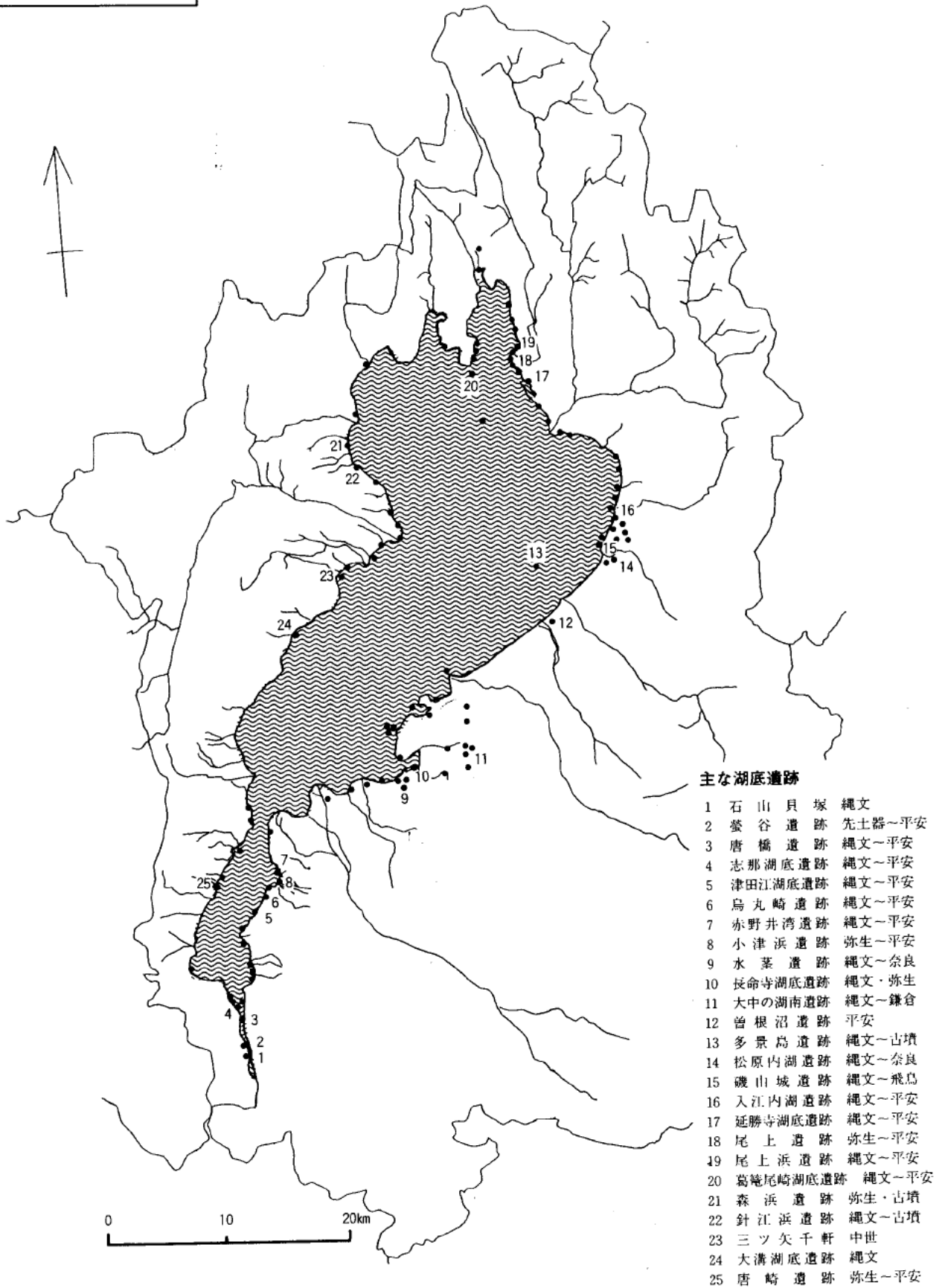


過去の水位変動



第2図 湖底遺跡分布図

出典(窪, 1994)

れる。針江浜遺跡や延勝寺湖底遺跡で浜堤上に集落や水田が形成され、烏丸崎遺跡では旧野洲川の堆積作用によって形成された砂嘴の上に弥生時代前期から中期にかけての住居跡や方形周溝墓群が形成されている。

また、志那北地区では弥生時代後期から古墳時代初頭の土壌や溝が、湖岸周辺の82.8m付近から検出されている。

志那湖底遺跡ではこれまでの分布調査や試掘調査から縄文時代晩期の甕棺が見つかった葉山川河口から津田江湾にかけての約3kmの間で、沖合い約1kmにわたって縄文時代から歴史時代までの多くの遺物が散布している。発掘調査した部分は湖岸地区中心で、沖合いについては葉山川河口の沖合いと志那漁港の沖合い約400m付近の2カ所を発掘し、それ以外はほとんど浚渫工事を行わずに遺構は保存されている。

分布調査や試掘調査の結果から志那の湖岸から沖合いにかけての広い範囲で湖底遺跡が集中している事が予想される。これらの遺物散布状況は湖底に大規模な集落遺構が存在することも予想される。

そうしてこれらの遺跡は湖底内に埋没する砂嘴や浜堤上に立地するものと思われる。

志那湖底遺跡の北に位置する津田江湖底遺跡では81.5m付近の土壌に縄文時代前期の土器が完形で出土

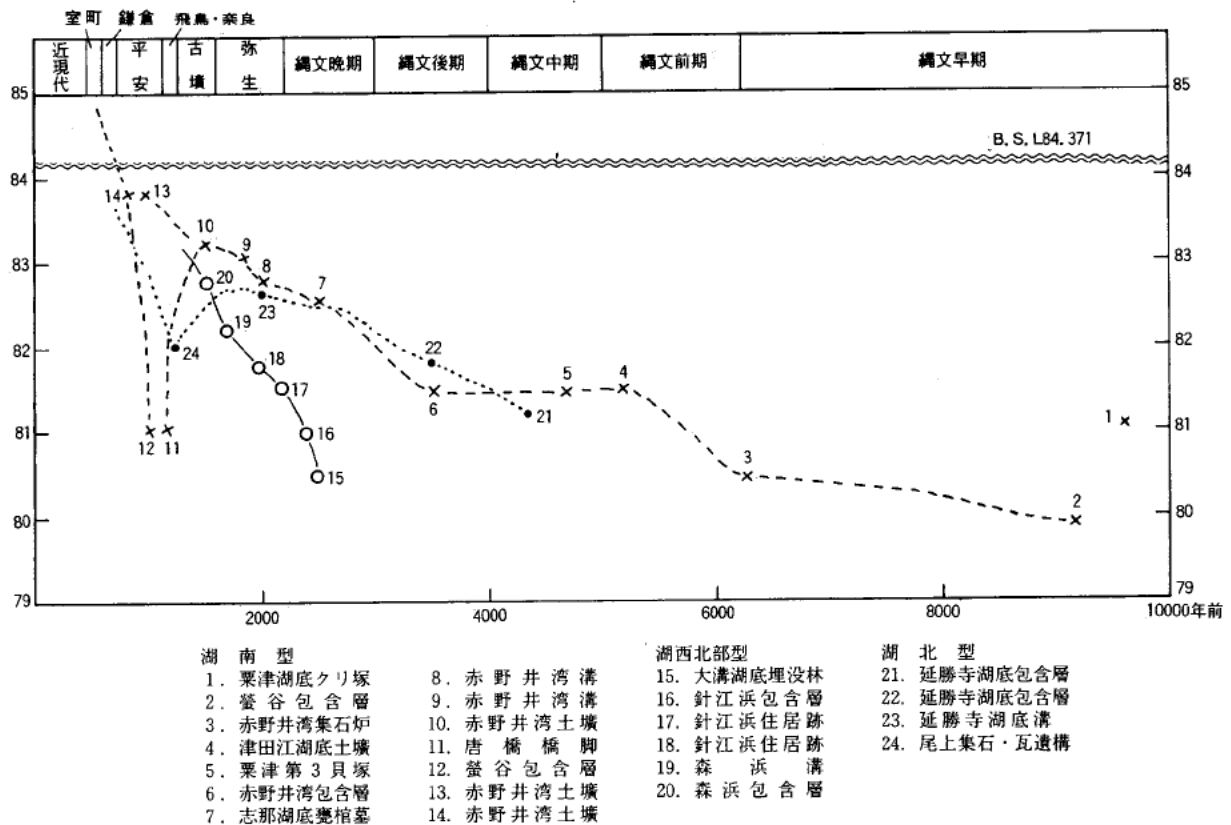
している。出土状態から土器を埋納して祭祀のために使われたものと思われる。

先にも述べたが烏丸崎遺跡は旧野洲川で作られた砂嘴で、その半島上には縄文時代晩期から弥生時代にかけての遺跡が存在する。半島の先端部分には弥生時代中期の玉造工房があり、それを取り巻くように方形周溝墓群が半島の列をなす。また半島の付け根部分には周溝墓の下層に突帯文土器をともなう弥生時代前期の遺構群がある。

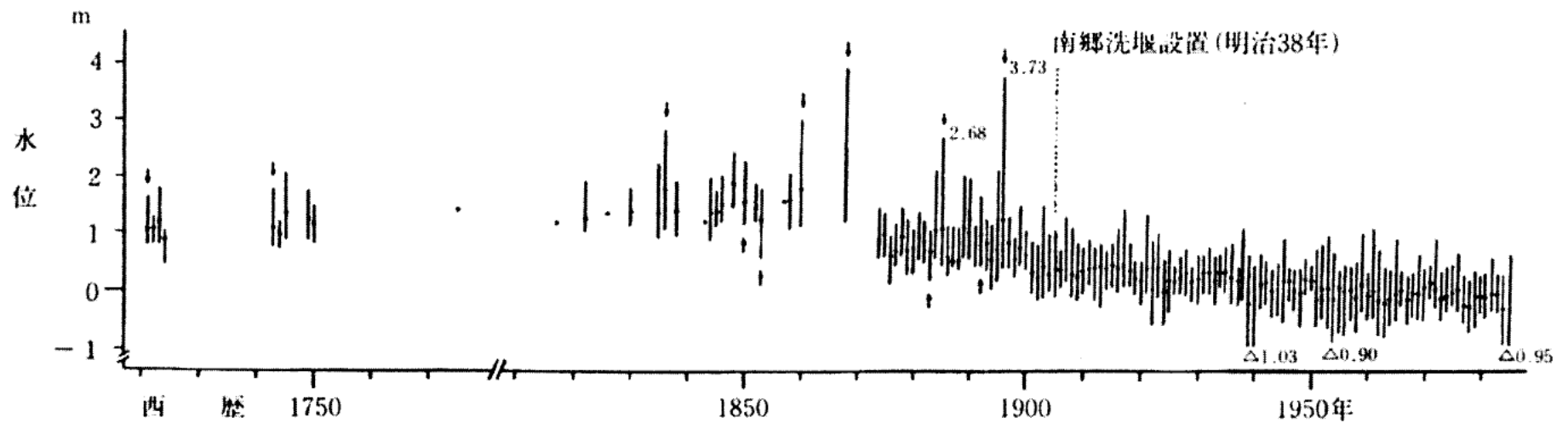
これらの遺構群は標高83.5m付近に位置し、この下層の81.5m付近の黒色粘土層は¹⁴Cで3,890 B. P.の年代がある。津田江湖底遺跡の81.5m付近では縄文時代前期の遺構があり、またほぼ同一レベルに縄文時代中期初頭の包含層が存在するから、半島の形成はB. C. 2,000～B. C. 500年前後の縄文時代中期後半から後期・晩期前半にかけて半島は形成されたものと思われる。

更に烏丸崎遺跡の北には赤野井湾湖底遺跡がある。湾内には縄文時代早期から平安時代までの遺構や遺物が多く出土している。

また、湖岸からやや内部に入った地点には小津浜遺跡がある。ここでは弥生時代前期から中期にかけての集落、方形周溝墓、水田跡などがみつまっている。ま



第6図 遺跡の推移と推移変動

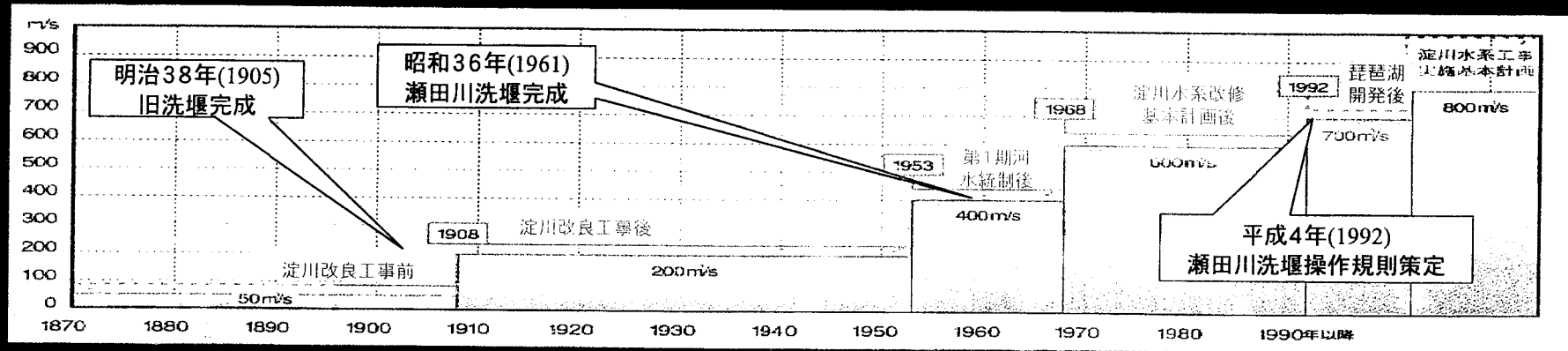


琵琶湖水位の長期変動（年最高水位，年最低水位および年平均水位）

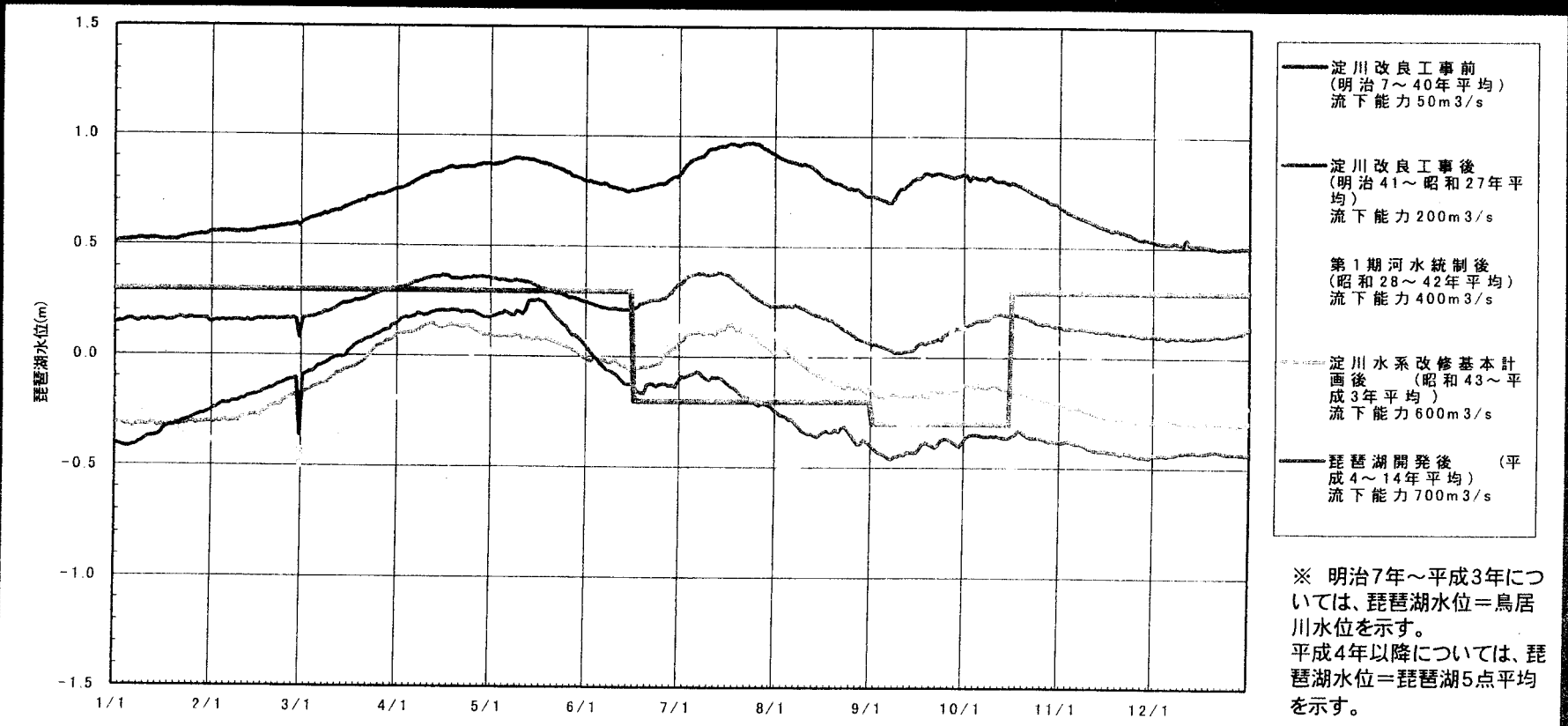
江戸時代の水位は、当時の定水位が現在の常水位より2尺5寸高いとして、小林（1984）より引用した値に2尺5寸を加えた値で表してある。数字は最高、最低（△）水位をあらわす。↓は大洪水の記録のあった年、↑は旱魃の記録のあった年を示す。

（西野、1986）

瀬田川流下能力の変遷と琵琶湖水位について



流量はB.S.L=0mにおける流下能力を示す。



※ 明治7年~平成3年については、琵琶湖水位=鳥居川水位を示す。
平成4年以降については、琵琶湖水位=琵琶湖5点平均を示す。

水位操作規則変更以前(1962-1991)および以後(1992-2002)の水位変化

